

インタビュー

森岡貞香氏に聞く

「女人短歌」と戦後短歌

聞き手・川野里子

二〇〇七年八月二十二日

於・森岡邸

◇体ごと戦争を乗り切った女のパワー

川野——戦後、数においても質においてもあれだけの女流たちが集まって、雑誌を作ることができたという、あのころの時代背景、時代の雰囲気みたいなものがうかがえたらなあと思うのですが。戦前から「ひさぎ会」というのがありましたね。

森岡——女流のこれぞという人たちだけのですね。人数を制限した、その当時の花形だけのグループだったみたい。私は歌詠みという程の人間ではないし、そういうしくみもまったく知らなかったのです。だから私は「女人短歌」

の設立、創刊までは無関係なのです。誘われたほうです。葛原もそうよ。四賀光子さんが「ひさぎ会」に入っていたから（潮音社の人たちには声をかけたの）。発会の集まりの時、私がいちばん年少者でした。後になって、尾崎孝子さん（「新日光」の創刊者）から聞いたところによると、女の人の進出が男性歌人には好ましくないことだったということが一つ。今は考えられないけれど、とにかく男性の歌人が威張っていたの。だから「女人短歌」を始めるという発想が出たときもまず、男性歌人に「お許しをいただく」ということが大変だったみたいなの。

川野——長澤美津さんが茂吉のところに挨拶に行ったとき、手土産のお菓子を出したら「これはいいものだ。もらった以上はわしのものだ」と言って食べ始めて、「でも女人は好かん。かんべんしてくれ、帰れ」と言われたって。あの話、面白いですね。

森岡——その程度だったのよ。個々にすぐれた人がいても、全体の水準として女人なんて問題じゃなかったのね。

川野——昭和二十四年の「女人短歌」発刊の呼びかけの文章に「新しい日本の文化の一面を背負ふ女性の力の大きいことを今日程痛感させられることはありません。古来、短歌の上に於いて女性の果たして来た部門の輝かしいものであることは今更いふまでもありません。戦後あらゆる方面に婦人の前に開かれた道は多岐多様であります」とありま

す。そういう雰囲気は満ち満ちていたのですか。その前年、二十三年に五島美代子が「女の歌」という文章の中で、女が女であることを恥ずかしがらずに、それを生かしているという呼びかけをしています。戦争から二、三年経った時期の雰囲気をお話しくださいませんか。森岡さんご自身が寡婦として一人で（子供を育てながら）生きて行かれていた時代ですね。森岡さんは戦後からその時代、「女人短歌」に入られるまではどういう生活でしたか。

森岡——私は戦争中、逗子に留守宅を持っていたの。主人は戦争へ行っていたから。逗子は山地ですから。でも逗子の山地に敵の飛行機を撃つための高射砲の台を作ろうということを集められたのはみんなおじいさんたちなのよ。学生は残っているけれど（毎日、勤労奉仕に駆り出されているし）、壮年期の男は戦争に行っていて、いないんです。（おじいさんたちは）木でこしらえたモッコに泥を入れてオツチラオツチラ（山道を）上がろうとするけど上がれない。それより二十歳代の女のほうがよくやれるわけです。戦争中に防空壕を掘ったのは女よ。だって、男は戦争でいないんですもの。

川野——男がいなかった分、女の人を全部カバーするかたちで社会に出て来た時代でもあったわけですね。女の人を実際にモッコを担いだり土を掘ったり、そういう勢いみたいなものはそのまま、「女人短歌」を作ろうという勢

いにつながっていったようなところはないでしょうか。

森岡——戦争の後の男の人たちには無気力があつたと思います。私たち女性はその間働いたし、戦後の生活も背負つたし、男に任せておくだけではよくない、われわれの結束で今後の日本ができるんじゃないかという気持ちだったのね。

川野——男性の力の衰えた時代に、実際に生活も支えながら、言葉の面でも女の表現を何か見出そうという感じがあつたんでしょうか。

森岡——あのとき、つまり戦場で一生懸命戦った人も敗戦で帰国して来て、昂然とは帰って来ない。こっちで待っていた人は「命があつて帰って来た。これからがんばらなきゃ」と言うけれど、帰って来た男の人は敗北感とか、残して来た人、殺された人（への思い）、そういうのがいっぱいあるでしょう。味方も死んでいった。それらの傷を抱えて帰って来ているから辛いですよ。

川野——例えば宮柊二は「沈黙」ということを大事にしますね。男の場合はそういうふうには言葉を内に抱えられないような深い沈黙、傷を抱えています。

◇ビタミン注射と長澤さんのおじぎ

川野——昭和二四年四月二五日に「女人短歌」の第一回総

会が開かれていますね。

森岡——銀座のオリンピックであつたの。現在なら中年層というところですが、当時としては五十歳代はもうお年寄り。黒い羽織を着て。私のはす向かいに清水千代さんという関西の歌人が弟子を四人連れて座つてたの。そのうちに弟子の人が「先生、いたしましようか」と言つて羽織をたくし上げて、やにわに注射針を出して注射したの。

川野——あつ、それ葛原のエッセイにもあつた。「〇〇女史はビタミン注射を打ちながらの発会式であつた」つて。昔かすにはいられなかつたんでしようね（笑）。

森岡——そう、ビタミンBなの。葛原さんと後で「あれみた？」つて話し合つたの。それがひとつのおしゃれだつたのよ。もう氣取つてたわよ（笑）。

川野——みなさん着物だつたんですか。

森岡——ほとんど着物。洋服はたつた一人、五島美代子さんが黒いベルベットの裾までの服でした。

川野——長澤美津さんが事務を一手に引き受けられたんですね。

森岡——ええ。「青垣」からはずされて無所属だつたから。それにお住まいにゆとりもあり、金銭的なゆとりもあつたの。この会のために「私を事務局にしてください」と言つてみんなのテーブルを回つたの。そのお辞儀の仕方がおかしいの。ふつう手を前に軽く置くでしょ。ところが手がず

い一つと垂直に落ちていくの。こんなへんなお辞儀があるのかとびっくりしたわ（笑）。

◇信州ではダントツに強かつた「アララギ」の力

川野——表現の上で見えますと、写実系の短歌は戦後、第二芸術論で主に批判の対象になってきます。方法論としての力を失つてゆきますね。

森岡——だけど失っているのは対外的であつて、心の中ではそうじゃない。女の歌などはやはり軽んじたわよ。これは斎藤史さんが言われたんだけど、史さんは東京の大森におうちがあつたのに信州に疎開したでしょ。でも、お金も収入もない。東京の大森の家は焼けて、焼け跡の土地はそこに住み着いた人にとられてしまつたようで、東京に帰ろうにも帰れなくなつた。その頃、信濃の地の新聞が、短歌の欄を作るから選歌をしてほしいと頼んで来たんですつて。それで、選者になつた。「ああ、これでいくばくかのお金が入ってくる」と私に涙をこぼしながら言つたの。でも、何ヶ月後かに、その新聞の部長が交代して、その人が「なんだ。「アララギ」の人に頼まないで、斎藤史なんて聞いたこともない女の歌人に頼んだのか」つて、史さんはクビになつちやつた。「アララギ」の会員で、地元にいる人に替わつちやつたんですつて。今からみれば「そんなときよく

炸

(さく)

松坂 弘 編集発行

高瀬 隆和 山中登久子
小川 昌雄 樋口 忠夫

「炸」短歌会

〒174-0064 東京都板橋区中台
3丁目27-A1305 松坂方

菊池 剣 創刊

やまなみ

会費 六ヶ月六、〇〇〇円
発行人 草野源一郎
四国短歌会 市川 敦子
福岡短歌会 野田 光介
福岡短歌会 幸藏
福岡短歌会 近藤 雅英
福岡短歌会 水落 妙子
福岡短歌会 草野 明
福岡短歌会 古賀 明

編集・〒854-0071 諫早市永昌町
15-1 草野医院内
発行所 Tel 0957(22)4730
Fax 0957(23)1213

やまなみ短歌会

幻桃

写実プラスα●新人歓迎

桐橋 長桑 菅内 前田 柴田 田浦
川島 水鳥 川川 田中 瀬中
原 靖和 洋英 明子 貞子 国規
好昌 靖和 洋英 明子 貞子 国規
江子 美子 夫人 子 則子 次
松村 政奥 渡遠 大 大 伊 岩
村井 村辺 藤 原 千代 崎
上 坡 美 千代 勢
あ 留 繁 快 保 里 津
や 子 悟 明 保 里 純

会費/年間12,000円 見本誌1,000円

幻桃短歌会 発行人 松村あや
〒502-0827 岐阜市平和通2-14-1
キャッスルハイム701

TEL058-295-1825 振替00850-5-10097

黙っていたわね」と言うけれど、黙るも何も初めから無視されていたんだもの。「たくさんの選歌料ではなかったけれど、私はそれを当てにしていた。大事なお金だった。そんな人に負けるとは思わなければ本当に情けなかった」と私に話したわね。その後、(復員された)ご主人様がお医者様で、信州の病院に就職なさったから、そのまま長野住まいになられた。東京の家がもし焼けていなければ帰って来たと思うんですけどね。

川野——斎藤史さんは「女人短歌」に創刊号から参加されていますね。斎藤史さんのような人でも、もし「女人短歌」がなければ自由に表現をする場がなかったということでしょうか。

森岡——さあ、どうかしら。私には史さんはわりあいとよく話をしたけど、そんなことは言われなかったわね。

戦争の終わる前の年のことですけど、蓼科高原に別荘を

借りていたの。諏訪の「柳屋」という由緒ある旅館が持っている二軒の別荘のうち、小さいほうを借りていたんです。その旅館は「音」の武川忠一さんの奥さまにゆかりがあつて、戦争が終わって武川さんが復員して来られてから、その別荘へしばらくいらしたんですって。ところが、それは戦争中、私がお借りしていた別荘だったの。これは戦後になって分かったこと。不思議でしょう。

川野——へーえ、偶然ですね。

森岡——その別荘へ「アララギ」が配達されました。というのは私が入っていた「ポトナム」が、「アララギ」と合併したの。歌の雑誌は、戦争が烈しくなつてどこかと統合したものだけが残されて、あとは全部潰されたんですよ。

川野——昭和十五年頃ですか、出版物の統制強化ですね。

森岡——それで、「水甕」系は「水甕」系で集まった。ところが、「アララギ」は分派がなかった。「アララギ」の雑誌

は会員が多くて、部数も多く出ていたのよ。でも、一緒に
なる歌誌がないと発行が止められたのです。一方、「ポト
ナム」も合同できるところがない。というのは、創刊者の
小泉蓼三さんはもともと「水壺」の編集をしていた方で、
京城の大学の先生に転任になったので「水壺」をやめて、
向こうにいらしたの。朝鮮で出ていた同人誌が合同して、
小泉さんを立てて「ポトナム」を作った。「ポトナム」って
朝鮮語らしいのよ。わりあい大きくて、会員が千人くらい
いたの。でも、そういう雑誌だったから、系統がなくて一
緒になるところがない。「アララギ」が潰れるということ
を聞き、このままなら「ポトナム」は潰れるから、それな
ら「アララギ」と一緒にしろ。そうすれば「アララギ」
も助かる。「アララギ」がなくなるのはやはり困る。玉碎
覚悟で、福田（栄二）さんが土屋文明に面会して、「一緒に
なりましょうか」と提案したの。それで一緒にになった。統
合後、「ポトナム」の編集者と二、三の人だけ、「アララギ」
の（鹿兒島寿蔵、土屋文明とか、そういう人が並んでいる
欄に歌が見えました。「アララギ」は他誌と合同したことで、
発行を続けられたということがありました。

それで、私が蓼科にいるときに「ポトナム」と一緒になっ
た「アララギ」が転送されてきたの。そうしたら、それを
持って来た郵便屋のおじいさんが、「奥さんは「アララギ」
の人かね。「アララギ」の人を飢えさせるわけにはいかん」

と言って、それから来るたびに、お芋があったりトマト
があったり。そして、「お金は要らない」と言うのよ。

川野——へーえ、すごーい。

森岡——あのころはモノがなくて、トマト一つを得るのに
も大変な苦勞をしたのです。それで私、おじいさんに「こ
の土地に「アララギ」の人、たくさんいるの？」と聞いて
みたの。すると、ほとんどがそうなんですって。郵便局長
さんも村長さんも何とかさんも全部、息がかかっている。
歌を作らなくても「アララギ」の会員ということは誇りな
のよ。だから、「ときどきお集まりになっていらつしやる」
なんて敬語を使うのよ。私、びっくりしました。それほど
「アララギ」の力が、信州では強かった。だから、史さんが
苦勞をなさったはずよ。

川野——それくらい「アララギ」の力が地方では根を張っ
ていて強かったわけですね。だから、戦後は短詩型文学、
特に写実の短歌に対しての批判が強まってゆくんですね。
森岡——強い何も、短歌っていえば信州のあの辺りでは
それしかないという感じでしたな。

◇「女人短歌」創刊号の巻頭ページ

川野——戦後、森岡さんの「白蛾」の歌は話題になってい
きますが、森岡さんの白蛾の描き方は「アララギ」系とい

うか写実の歌い方ではなく、自分が蛾そのものだという感じで蛾の苦しむ様子などを描写していられる。そういう、主情によって言葉を切り拓いてゆくような、自分の肉体の感覚とか自分の気持ち、蛾そのもののような表現ですが、写実系の「アララギ」の地盤が強いにもかかわらず、戦後、話題になるわけですね。

森岡——文体をこうしようとか、こう歌うべきだとか、他の人が歌っていないなんて考えもしなかった。「白蛾」の歌はかなりここ（『女人短歌』）にも出ているわね。「女人短歌」の創刊が二十四年でしょ。（歌集の）『白蛾』が出たのはちょっと後ですよ（昭28）。私の歌がどうしたことか、創刊号の巻頭ページに大きく出ているでしょ。

「女人短歌」では四賀光子さんと若山喜志子さんが大御所なの。斎藤史さんの名前は『新風十人』で輝かしく残っている。だから、この人たちは巻頭ページね。あと、だれを載せるか。最初のスタッフたちのはだれを入れても難しいところがあるから入れられない。どうするかと言っているところへ、川田順さんが、川田さんは鈴鹿俊子さんと恋愛をして結婚されて間もない頃で、この企画（『女人短歌』創刊）を聞いて、鈴鹿さんの歌を持ってきたんですって。そして、「とにかく俊子を一人前の歌人にしてやりたい、よろしく頼む」って。川田さんは「心の花」の人で、「女人短歌」の将来を考えるとあの人の頼みですから入れましょう

ということ、鈴鹿さんの歌を入れたという話を後で聞きました。あと、一人分空いている。さあ、どうするかって編集会で相談したんですって。だれかの弟子が一人入っては先生も弟子も具合が悪い。そうじゃなくて、だれかい歌がないかと端から見ていったら、私のが残った。

川野——では、抜擢という感じで入ったわけですね。

森岡——「この人、どこの人」と言ってもみても、だれも知らないと言います。阿部静枝さんが「たしかこの人、『ポトナム』だわ」と言ったんですって。そんな話も後で聞きました。

創刊号が来たとき、ページをめくっていったら自分の歌が巻頭にあるのでびっくりしましたね。『新風十人』で有名だった斎藤史さん、女学校のときの副読本に若山牧水と載っていた四賀光子さん、そんな人と並んでどうして私がこんなところに入ったのか、不思議だね。だけど、聞くわけにもいかない。しばらく経って、どうしてだったのかと聞いたら、創刊号の巻頭の五人についてそういうことを聞かされました。

◇揺れに揺れた編集方針

森岡——最初、私を巻頭に出したでしょ。その後、揺り返しがあつてね。自分じゃこの前よりもいいと思っても、巻

頭は編集にタッチしている人たちの歌。その次の欄は自分たちの大事なお弟子さんの歌なの。だから、その縁故のない人は可哀想だった。遠山光栄さんも委員だけれど編集にタッチしてないから（後ろのほう）。（当時の「女人短歌」をめくりながら）何しろ自分の歌を探すのにいい加減たいへんね。どこに出ているやら。それが途中からまたガラッと変わるの。

川野——最初はトップページで、だんだん目立たなくなるんですね。編集方針が揺れに揺れたんでしょうか。

森岡——べつにそれが最初の歌と比べて上手でもないけど下手でもなく、私にとっては一号の歌と変わらない普通の歌なのね。だから揺れたんじゃないかしら。

川野——編集方針も揺れながら、外からの批判にも答えながら、カオスみたいな感じで運営していたという感じでしょうね。

森岡——そうね。そして、男の人たちの批評をとても気にしていた。あんなに気にしてどうなるものかと思つたわ。私が編集に加わつたのは三年くらい後。選挙ででしたね。

川野——いろいろな女流たちが出会う場としての「女人短歌」という雑誌ができたわけですけど、実際、勉強会とか歌会というのはどうかたちでされていたのですか。

森岡——厳しくなく、やさしくなく丁度良いところですね。だれも先生でもなく弟子ではないのですから。それに歌風

も違う。いろいろな意見が出ましたね。これは良いことだった。

川野——それは月に一度くらいの割合でしたか。

森岡——そうですね、私も毎月は出なかつたけれど。みんな、この中の歌でもって（批評しあうだけで）、歌会のために自分の冒険の歌を一首出すなんてことはなかつたですね。でも、歌はかくあるべしという押し付けはないし、方針もなかつたから、思想的には山田あきさんなど、いろんな人が集まりました。

◇新歌人会の発足

川野——「女人短歌」は昭和二十四年の創刊ですけど、翌年から中城ふみ子も参加し、葛原妙子も参加して、たちまち女人短歌叢書から重要な歌集が出てゆく。五島美代子の「風」、葛原妙子の「橙黄」もそうですね。いろいろな女流が集まつて来て、そこで刺激を受けあつて花開いていくような、そういう場であつたような感じがします。

森岡——だけど中城の場合、中井英夫さんでなければ出なかつたと思う。新人を育てるのが上手だった。

川野——ああ、確かに中井さんの力は大きいですね。

森岡——中井さんが若い層を自分でチェックして「新歌人会」というのを作つたの。昭和二十五年くらいかな。主宰

鈴木幸輔 創刊

長風

編集合議制

鈴木幸彦	片岡明	伊藤道子	金子正男	毛利文平	上月昭雄	杉本清子
発行人	発行人					

会費	6ヶ月	6,000円
購読会費	6ヶ月	4,800円

長風短歌会

〒353-0004 志木市本町 2-11-48

金子正男方

☎(048)471-4820 振替 00160-2-72852

秋 楡

前田夕暮・透「詩歌」系
顧問 前田雪子

創刊 平成14年 2月

代表 三宅千代

小中学生の部あり。新人歓迎

秋楡短歌会

〒463-0010 名古屋市守山区
翠松園 3丁目930 三宅千代方

☎(052)791-0558

白南風

2000年 7月創刊

白秋短歌の精神を核とし
より深く自己の個性の伸長を計る集団

鈴木白鳥	東秋木	栗林喜	野口泉	小鈴千	立花千	荒井千	谷口勝
諄三郎	芳實	の静美	桃枝子	敏代	乃富子	玲子	利子

発行所 〒204-0004

東京都清瀬市野塩 3-40-25

鈴木諄三方

白南風短歌会

会費1000円 見本誌500円

振替 00130-9-190375

者はいなくて若手のグループ。「女人短歌」から葛原妙子さん、遠山光栄さん、真鍋美恵子さん、熊谷とき子さんなど、私も加わりました。男性は岡部桂一郎さん、玉城徹さん、片山貞美さん、千代國一さん、山崎一郎さんとか、他に若手の人たちも加わりました。それに前後して歌人クラブの発会もあって、斎藤史さんが講演して、そのとき初めて斎藤史さんと会いました。「女人短歌」の発会式には来られなかったから。

川野——中城は入ったんですか。

森岡——もうそのときは入院してたわね。それで、その会ができたとき「短歌研究」が特集をしてくれたの。私も歌を頼まりました。見開きに四人。葛原はそこに入らず「日本短歌」のほうに掲載されたの。それが葛原の総合誌の初めての掲載。もうはりきっちゃって（笑）。

川野——非常に気分よかった感じの歌でしたな。

森岡——新歌人会は自分たちの合同歌集も出したと思います。でも、新歌人会はどういうことか間もなく終わってしまいました。その辺りのことは私には判らないのですが、でも、新歌人会ができなかったら、また歌壇史はちよつと変わってたと思うの。

川野——今、短歌史からは消えていますね。新歌人会のことはどこにも書いてない。

◇女の歌は理屈じゃないの

川野——「女人短歌」創刊後の激しい批判、それに答えるように生方たつゑが、自分たちの歌のほうも甘えがあるという反省を一回します。例えば「一つのものへの感情蓄積が十分に行われないで不消化のままで吐出されてしまうようなサッカリンのやうな甘さ」とか、「末梢神経的な甘さで

は困りものだ。女性は特に感性が鋭敏であり随つて感動のままに支柱のない流れ方をする危なさをよく自身が知つて置かねばならないと思ふ。溺れるやうな感情を持つてゐていつでも溺れない主観が欲しいのである」とというふうなことを「女人短歌」創刊の翌年に書いています。そうするとガーツとエネルギーが集まつて作つたはいけれど、そこで歌の立て直しというか、歌論が求められたわけですか。

森岡——そう。歌論はなかった。といつても、少しはあるわよ。でも、女の歌は理屈じゃないの。男のように理詰めで来てないのよ。だから、容易に歌論へ持つて行けないんです。男の人はそうじゃないから理論的になれる。女の方は体感と直感とでより合わせたようなところから来ている。川野——私、その論理的じゃないというところ、本当に大切だと思うんです。それ、短歌史になりにくいですけど、戦後短歌の重要な源動力だったと思うんですよ。でも、あの当時の反響を読んでみても、女流が集まつて会合なんかに出て歩くのはけしからんとか、作品とは無関係に生理的に拒否しましたね。

森岡——決して好意的ではなかった。多くの男の人はよく思つていなかった。女ばかり集まつて勉強になるのかつて。川野——かなり激しいですね、あの反応は。それは中城が出たときにも向けられ、葛原にもずっと向けられ続けますね。葛原の「橙黄」が出たとき、ここの料理はまずいだの

おいしくないだのという話をしながらタバコをふかしていたとか、そういうことが歌より以前に批評の槍玉に上がっています。森岡さんや葛原、中城がたたかれたときも、当時の資料をみると、「女人短歌」の人たちが擁護していますね。いちばん深い読みができてるのは「女人短歌」の人たちだった。

◇「アララギ」の大内豊子との交流

川野——「女人短歌」には「アララギ」系の女の人があまり入っていませんね。

森岡——でも、たまに入っていましたね。山口茂吉の奥さんの大内豊子さんがそう。「アララギ」でとてもいい欄に出ている人なのよ。「女人短歌」の会にも出て来てたし。でも、ご主人が結核になつて、お子さんがなかったから、「歌集を売つたらいい値で売れるから売ると言ったら、主人がいやだと言うの。でも、今、主人は無収入なのよ。だから、内緒で歌集を売っているの」と言うの。とてもはつきりしていい人だね。

大内さんとはわりあいおつきあひがあつた。ご主人の山口茂吉が亡くなつて、新宿の太宗寺でお葬式があつたんです。「主人が生きていたら怒るところだけれど、背に腹は代えられないし、私が持つていてもしょうがないからつて、

初版の『赤光』から何から、本はかなり売った」って言っていたらしい。

川野——うわあ、もったいないこと。

森岡——いつか茂吉展に行ったら、大内さんが持っている、茂吉が書いた歌に絵をつけた色紙が一つ出ていたの。ああ、これ、売らなかつたんだなあと思って。大内豊子さんが「アララギ」で「女人短歌」に入っていました。どうして入られたのか知らない。その他、「アララギ」では私の知る限りでは熊本本の頼園に居られた津田治子さん。歌集もあります。これが良い歌集だね。あの方の原稿も見ましたが、ゆつたりとした良い字を書かれましたよ。

川野——「女人短歌」への勧誘では、最初に声をかけるとき、こういう範囲にしようとか、何か規約や方針があったんですか。

森岡——私は声をかけられたほうの一人だから、他の人のことは分からない。「潮音」は四賀光子さんが協力するということになって、主だった人が入ったと言っていたわね。私が「女人短歌」に入ったのはこんな経緯があるんです。のちに歌集『白蛾』におさめた蛾の歌などを、尾崎孝子さんの「新日光」という総合誌の二号に載せてくれたの。したら、それが面白いて、朝日新聞から出ていた雑誌も「新日光」の私の歌を取り上げてくれたり、評判になった。尾崎孝子さんは「短歌新聞」の小ぶりみたいな新聞「歌壇

新報」も出していたの。昭和二十二年に創刊した「新日光」は三号までで終わつたけど。だれかが横浜の図書館にあると言つてましたね。尾崎さんが私を誘つて「女人短歌」に加わることになったの。だから、私は「ポトナム」から行つたんじゃないんです。

川野——それは「女人短歌」創刊より前ですね。そうすると戦後は、いろんなところで以前は会わなかつたような人たちとの交流が始まつていて、その中の一つとして「女人短歌」も、始まつたということでしょうか。

森岡——まだそのときは「女人短歌」の話は全然ないの。

◇折口信夫と「女人短歌」

川野——折口信夫の「女流の歌を閉塞したもの」は「女人短歌」への励ましというか機動力になつたのでしょうか。

森岡——私、あの話を生で聞いたんです。昭和二十五年十月のこと、「女人短歌」の批評会の日（ナ）にちょうど、明治神宮主催の短歌の会で折口さんが話をするということがあったんです。北見志保子さんは折口さん一辺倒の人だったから「今日は折口さんの話を聴きましょう。珍しいことだし、われわれがここで勉強会をするよりも、ずっとプラスじゃないか」と言われてね。そのころ、明治神宮は空襲で大方が焼けてその後、森の中でテント張りで会をやったことも

あったくらい。有楽町にあった毎日新聞は焼けてなくて、そのホールを借りて、明治神宮の奉納短歌大会があったの。入選した女の人は留袖を着て出席してた。そこへ折口さんがいらして、「女性の歌について」という話をなさるということと、急遽、全員、毎日ホールに行ったのです。

川野——「女人短歌」創刊号が出た後、女人短歌の主催で「文芸土曜講座」が開かれていますね。その第一回の講師が折口信夫です。それではないんです。

森岡——その講座より後。そのときの折口さんの話は翌二十六年、「短歌研究」の一月号に出ました。講演のときは「女性の歌について」だったと思うけれど、雑誌では「女流」という題になっていた。あれは折口さんが速記原稿を見て、多少手を入れられたんですって。そこで「女歌」になったのね。そのころ、似たような文章も書いていらつしやいます。

川野——昭和二十五年の「女人短歌序説」や二十六年の「女流の歌を閉塞したもの」などですね。

森岡——この日は「女人短歌」の人は三十人くらいかな。一般の人も見えていて。折口さんは「女性の歌」とか「女人の歌」とおっしゃって、「女歌」という言葉は出なかった。川野——折口は「女流の歌」と言っていますね。

森岡——あそこで、「アララギ」が女の歌を殺したなんてしゃべったのが活字になったでしょ。それで、「アララギ」

の人たちがいろいろと言ったりして、当時は問題になったんですけど、講演だけだったら、今みたいに録音テープがあるわけじゃないから、そのままになったと思う。あの講演を生で聴いた「女人短歌」の人はもうだれもいなくて、生き残りは私くらいじゃないかしら。

川野——「女人短歌」が創刊され、批判とともに「これが反響というものかしらと思う。一種の戦慄感を覚えた」と長澤美津さんが書かれ、よほどの反響があったんですね。かなり大変だったと思いますけれど、「女流の歌を閉塞したもの」など、折口信夫の発言は言論的な支えになったのではないですか。

森岡——支えというか、利用させてもらったというところだね（笑）。

川野——ああ、そこが大事だと思うんです。葛原も「折口さんの言っていることは違つて、私たちの意志ははじめからもつとあったのであって、折口さんに答えたのではない」ということを繰り返し言っています。

森岡——そう。だけど折口さんのあの話がなかったら、やはりうまく行かなかつたでしょう。川上小夜子さん、北見さんは折口さんを本当に尊敬していて、前から私淑してたわね。折口さんの講義を慶応（大学）に聴きに行つてたし、折口さんのことがとても大切に入つていた。当時、その人たちが「女人短歌」のトップでしょう。

川野——創刊メンバーのうち北見志保子、川上小夜子、長澤美津、生方たつゑ、若山喜志子などは戦前の女性歌人の集まりの「ひさぎ会」のメンバーですね。その後の世代としての森岡さんや葛原あたりとのずれもあつたんですね。森岡——あつたと思いますけど、とにかく創刊が浅いから協力してやっていこうということだったわね。私たちはだれも立ててくれないの。

私もそれまで折口さんなんてよく知らなかった。斎藤茂吉、土屋文明は歌集もあるし、名前を聞けれど、折口さんの歌集も持っていないし、ああ、そういう人がいるのかと思つてたくらい。だから、生まれて初めて折口さんの話を聴いて、ああ、これが折口さんという人かつて。その講演のときから実際の感じに入つたけれど、それまで折口さんの名前は染み込んでいなかった。それから折口さんの歌集を読みました。

川野——「女人短歌」では、創刊時の発起人が戦前からの世代で、森岡さんや葛原はちよつと新しい世代になつてゐるんですね。森岡——だから、もしかしたら私たちは異端だつたとも思っています。

◆女の系譜に執着した五島美代子

川野——「女人短歌」が創刊して五年目に茂吉と折口信夫が亡くなりますね。ここで近代が終わるという見方もあるほどの大きな節目です。そのころの様子はどうか。森岡——折口さんとはあまり接触がなかった。あそこで講演を聴いたり、書いたものは全集みたいなもので読んだけれど、それ以上の接触はないんです。折口さんと「女人短歌」自体はそれほど接触はなかったわね。土屋文明、斎藤

短歌往来

月刊短歌雑誌 毎月15日刊

購読料 半年 四五〇〇円
一年 九〇〇〇円
右は送料込みの値段です。
定期購読をお薦めします。

●ユニークな企画 ●新人発掘 ●批評の発見 ●地方への視野
●高齢化社会に対応 ●前川佐美雄賞 ●ながらみ書房出版賞

栗木京子 著	名歌集探訪	定価 二七三〇円
猪股静彌 著	荏菁集全解説	定価 三二五〇円
岡井隆 著	わかりやすい 現代短歌読解法	定価 二六二五円
春日真木子 著	101首鑑賞	定価 二七三〇円
渡辺松男 著	〈空き部屋〉	定価 二六二五円
高島裕 著	薄明薄暮集	定価 二六二五円

歌集・歌書刊行のご相談に応じます

ながらみ書房

東京都千代田区
三崎町3-2-13-406
Tel 03-3234-2926
Fax 03-3234-3227
nagarami@jasmine.ocn.ne.jp

茂吉とも接触はないのですけれど、その弟子たちとの接触がある。近藤さんがそうでしょう。

川野——五島さんのお嬢さん（長女）が亡くなったときも、ただ一人、五島さんが連絡したのが近藤芳美さんだったという話ですね。

森岡——そうですよ。あれだつてずいぶん誤解されて伝わっているわよ。私は本当のことが分かっているけれどね。ご当人があまり言いたがらないからしようがないけど。

川野——近藤さんは葛原にもやさしかったですね。葛原への追悼の言葉も深く胸に残ります。

森岡——終戦後に私が結社をやめて、女が結社を出たら大変だと言われているときも「どこにも入らなくていいよ。もしも、総合誌が載せないなら「未来」が載せるから大丈夫だよ」って屈託なく言つてね。宮村二さんがそばで聞いていてびっくりしてたわ（笑）。

私が思うのに五島さんは特殊な人。身ぐるみ歌の中に入り込んでいと思う。「女人短歌」が始まったとき、斎藤史さんも歌は達人ですけれど、ある意味で昔ながらの伝統的な女流の歌の質を受けていたのは五島さん。

川野——そうですね。文体といい、歌い口といい、戦前からずーっと、さらには王朝あたりからずーっと繋がって来た文体を、戦後に向かって抱え持つて出て来た感じがします。

森岡——そう。あの人は体が弱くて、女学校も行つてないし小学校へも行つてないんだから。ご両親が学者だから、先生を一人ずつおいて、全部個人教授。「源氏物語」なんて讀じてたわ。私、一度、五島さんに「源氏物語」をちよつと聴かせてくれないかと言つたら、いやだと言ふのよ。「そんなこと言わないで、ちよつと聴かせてよ」「じゃあ、聴かせるけど、どこがいい」と言われて、私は、そうは言つたものの「ここがいい」と言えないわけよ（笑）。思い出しながら「紫の上の子供のときのところ、あの辺り」と言つたら、小さいきれいな声で全部讀んじていらつしやいましたね。一言も間違えない。学校へ行かなくても、そういう教育を受けたの。「万葉集」からずつと古典を勉強なさつてゐるの。それは全部讀じてゐるつて。

川野——すごいですねえ。そういうことは戦争中にも生かされなかつたし、戦後、あるとき、ある女の人の力としてかなり大きなものになつたのではないですか。

森岡——五島さんの歌をつぐ人は、今はいないけれど、五島さんの歌を私はわりあいよく理解したの。

川野——五島美代子はある女流の伝統みたいなのを、少し近代を飛び越えたところから繋いでいますね。五島さんについて面白い逸話を以前、伺つたことがあります。次女のいづみさんが交通事故に遭つて入院されたとき、お見舞いに行かれた森岡さんに、そんな状況の時に自分の血統が

どんなに大切かという話をされたとか。

森岡——「森岡さん、自分の血統は女の子でなければ伝えられない」というようなことを言われて。そのとき、ハツと思つたの。五島さんの歌が理解できた。〈白百合の花びら蒼み昏れゆけば拾ひ残しし骨ある如し〉。これはお嬢さんの骨を拾つたときの歌で、自分はなおかつ拾ひ残した骨があるようだと言つて、亡くなつた子供のことを思つてゐる歌だと多くの人は言うけれど、これから生まれてくる者に対して、多分そういう歌なの。

川野——娘が生きていたら将来に産んだであろう子供の骨、しかも女の子の骨ですね。すごい！

森岡——そう。女の子に限るの。そして、長女が亡くなつたことで血統が切れたということのようだった。だから、みんなはこの歌は感覚的な歌だと言うけれど、違うのよ。

川野——女の自分の血を伝えるための女の系譜への執着、鬼のような執着ですね。

◇自分の命と直結していた言葉

川野——先ほどのお話にもありましたが、女の人たちは、自分たちの感覚的に持つてゐる歌を外に伝えるのに、ずいぶん苦労したのではないですか。

森岡——そんなこと、考えもしなかった。歌論を立てるな

んてことを考えるような感じじゃなかった。それは私だけではなく、だれもだと思ふ。葛原妙子だつてそう。「女人短歌」発会の総会の後の食事会のとき、相談しては、葛原さんがすつくと立つて、「私どもは四賀光子先生の選を受けております。女人短歌誌上では、企画をなさつた北見さん、五島さんたちの選は受けません。ご承知おきくださいッ」なんて言つたのよ。

川野——そう言いながらもいちおう「女人短歌」に集うわけですね。今なら「入らない」という選択をしますよね。それでも「入る」というのは、当時の雰囲気のような感じがします。

森岡——担当者の方々は「私たちもべつに選をしたいわけじゃないけれど、歌稿がたくさん来て、ページに入らなければ選をしなければなりません」と編集スタッフは言つてたわね。「だから、数を決めて、少しにしていただければ、それはそういうこともできますね」なんて、最初から丁々発止ですよ。

川野——そうやつて出会つて、葛原は森岡さんに「友達になつてほしい」と言い寄つて来ますね。一方ではまた、葛原は森岡さんの『白蛾』の歌を真似して、一生懸命、自分なりに作ろうとしてみたり。

森岡——いろいろやつてみてたわよ。茂吉の歌にもめり込むんです。「これ、ちよつとどういう意味」なんて、夜中

に電話をかけてきて、「こんな夜中に何の用かと思えばそんなこと。明日でもいいじゃないの。眠いのに起こされて」なんて言ったことがあるわよ。他人の迷惑なんてかわない（笑）。

川野——葛原は森岡さんの影響を受け、中城は葛原の歌を真似したような歌をいっぱい出していますね。

森岡——かなり中井さんのアドバイスがあったと思う。大体、「潮音」はあでやかな歌が多いんですから。戦時中に「潮音」で一番有名な歌は井戸川美和子さんの〈千人針われに征旅の夫ありて折は熱し縫はしめたまへ〉。あれだけはラジオで毎日のように放送したわね。井戸川さんはこの発会式のときは北海道にいたの。もちろん「女人短歌」のメンバーに入っていたのよ。でも、会にはいらつしやらなかった。葛原さんは「潮音」では目指していた人があって、「倉地与年子さんほどになりたいなあと思っている」って当初の頃は私に盛んに言っていました。

川野——その話をされた後からでしょうか、葛原の歌がすごく変わっていったのは。葛原が倉地さんと一緒に別荘に泊まったことがあって、そのときに自分たちの感覚的な歌をどんどん作って行こうみたいな話を二人でするんです。そのころ、森岡さんも肉体感覚、髪の毛とか皮膚とか影とか、そういうものに敏感な歌をたくさん作っておられた。阿部静枝さんもそういう歌を作っておられた。

森岡——私はあまり人の歌に影響されなかった。自分なりの体当たりの歌よ。そのときは恥ずかしいってことはなかった。自分を見つめていけるようなものを一つ持ちたいなと思って、それなら何となく短歌にということで、気が変わったの。怖いとか恥ずかしいとか、それなしでやろう。あえて発表しなくてもいいんだから、何でもいいわと思うて。だから、発表する気はなかった。

川野——それが発表されたことによって、パワーを生んだわけですね。当時の葛原の作り方もそうですけれど、ものすごく正直な歌というか。今は発表されることを意識して作りますが、その当時の女の人の歌を見ると、自分の持っている感覚を何とか言葉にしようとか、何とか自分の抱えているドロドロの内面を書こうとか、正直さがありますね。

森岡——そうよ。

川野——自分の命と直結した、かつがつ生きて行くということに直結した言葉というものが、一つ、「女人短歌」のパワーにつながっているという気がしてなりません。

◇「女人短歌」の全盛期は十年

川野——「女人短歌」は短歌史上でも異例の雑誌として長く続きましたね。

森岡——でも、私にはこの各地の各派の集まりの「女人短歌」をやめるのは「今がやめどきだ」という思いに実感があつた。私のところでやめないと、もし若い人に移っちゃつたら、もうやめる力がなかつたでしょう。やめるというのはとても力が要ることなのよ。始めるのと同じくらい力が要ると思つた。ここでやめなければジリ貧になつておかしいことになるから、絶対にやめようと思つた。

川野——「女人短歌」がなぜこんなに長く続いたのか。森岡さんはどういふふうにお考えですか。

森岡——それは分からない。ただ、私はこの辺でやめなきゃだめだと思つたのは、老いてゆく人たちに対して、若い女流の人たちが加わつてこないこともありました。

川野——止める事のほうが難しいというのはよく言われますが、「女人短歌」もそうだったんですね。でも、葛原を見ていてもそうですが、「女人短歌」という場が表現にとつてすごく大きな契機になつたんですね。

森岡——そうだったと思う。葛原さんは「女人短歌」がなかったら、ああはならなかつた。それは思いますよ。

川野——あそこでものすごく大きな刺激を受けて、勉強しなきゃならないっていうことを、いろんな人が強く思つたようです。ね。「女人短歌」はそういう場としての濃密さ、パワーを持っていたんでしょうね。

森岡——そうなの。大西民子さん、富小路禎子さんは噂を

聞いて、「女人短歌」に加わろうと思つたんでしょう。中城も入つてる。ところが「まひる野」の女の人は今思うと一人もいないの。「女人短歌」の発刊とは無縁であつたのかと思ひますね。それに馬場さんは若いのよ。

川野——馬場さんは森岡さんよりさらに若い世代になるんですね。当時はまだ乙女（笑）。

森岡——そう。私が馬場さんを認識したのは、深作光貞さんが「ハムレット」の劇をやつたでしょう。あの辺りからその頃、篠さんが私に「若手の秀れた人がいるんです」と言うので「何という方ですか」と聞いたたら、「馬場あき子さん」と言つたことを覚えてゐるの。

川野——「女人短歌」の中でも創刊メンバーと森岡さんたちとは世代差があり、そしてまた馬場さんとの世代差も若干あつたということです。から、戦争の影響を直撃されたメンバーで構成されていたのが「女人短歌」だと言つていいんでしょうか。

森岡——そう言つてもいいと思いますね。ある一時期ね。私だって、「新日光」に蛾の歌を出してゐなかつたら、多分創刊に加わらなかつたかも。それが崩れてきたのは寺山修司とか、中城ふみ子が世に出た辺りからですが、編集者の中井英夫の存在も大きいですね。同人誌「灰皿」というのも近藤芳美さんたちと私も葛原も加わつた同人誌ですが、あの辺りからでしょう。「女人短歌」の発行当時の気負いが

失せてきたように思います。そのかたちが壊れたのは。それと、もう一つ悪かったのは、五島さんがいやになってやめたの。抜けたでしょう。川上さんが死んだでしょう。北見さんも病んで亡くなられました。残ったのは長澤さんとか阿部さん。この辺りから、広がりがなくなりました。

川野——昭和二十四年創刊で、女歌の論争があったのが昭和三十年前後、三十五年くらいまで女の人の歌が前衛短歌と平行しながら議論されていきますね。その辺り、創刊十年間くらいですか、「女人短歌」として実質的なパワーがあった時期は。

森岡——そうだと思いますね。最初にみんなが歌集を出したのが何年目かしら。あのときはまだ盛大で、意気盛んで十何冊一緒に出版記念会をやったので、男の人がオオツと驚いた。

◇富小路禎子のプライド

川野——先ほど、富小路さんの話が出てましたが、富小路さんのとても有名な歌がありますね。〈処女^{とろひ}にて身に深く持つ淨き卵秋の日吾の心熱くす〉。卵、卵子などということを昭和二十三年ですか、あんな時代にボンと言えたというのは、富小路さんも「女人短歌」のパワーというものに背中を押されるように出たんでしょうか。

森岡——富小路さんは歌会にもよく出て来ていたの。お正月の集まりには振袖でいらした。戦後の間もない昭和二十年代のことです。華やかでしたね。歌留多を取ったの。五島美代子さんがきれいな声で、三組くらいの歌留多の皆さんの周りを廻られた。大西さんは一回も出て来ない。

川野——富小路さんはとても熱心だったんですね。富小路さんは、ご自分の出身がお公家さんだということを隠していたというか、断ち切るようにして戦後、生きた方なんですか。

森岡——そうですね。だから、「自分」はあるけれど、歌の仲間とそれとはもう別にして切っていらしたようですね。

川野——富小路さんは背筋がピンとしたところのある人だなあとありますが、そういうところがあつたんですね。

森岡——伝え聞くところでは、外食だけで炊事はほとんどなさらなかった。台所道具はない生活のようでしたね。

川野——包丁も狙もなかったとか。

森岡——一切しないのね。だけど、年をとって、包丁も使わず、お鍋も使わず、外食など寂しくなかったかなあとと思うのよ。

川野——うーん、生き方として壮絶ですねえ。

森岡——最近、女人短歌の創刊号からの合本を改めて見直してみていて、いろいろなことを思い出しますが、例えば葛原妙子の歌を見ながら思ったことは、創刊以来一度も休

詠ということはありませんでした。歌集に入れられてない歌もかなりの数あると思います。没後、妙子の全集を刊行の時も迷ったのですが、妙子自身が歌集に採らなかつた歌の数々、それらを全集に入れるということは、私としては故人の意思を尊重して加えることはしませんでした。

長澤美津さんは、最初から終了まで事務局を担当された。長澤さんの歌は地味なので、あまり取り上げられていませんね。でも良質で簡潔な良い歌を詠まれた。もつと認められて良い歌人だと思いますね。「女人和歌大系」という仕事を完成されたことも、「女人短歌」の会があつての大きな仕事であつたと思うのです。

——思い出すと、いろいろなことがありましたが、「女人短歌会」の歌誌として、昭和二十四年から季刊「女人短歌」があります。平成九年までで一九一号まで発行して会を閉じたのですが、戦後の女性の短歌活動として後に残る歌集も多くあり、女流短歌史の現在にも連なることと自負しているのですけれど。雑多なことを今日はお話ししてしまいたね。

川野——今日は五島さんにしろ富小路さんにしろ、「女人短歌」に絞った女性たちの生き方をうかがいましたが、激しいですね。葛原妙子の生き方、内に秘めた激しさ。戦後の女性って、すごいですね。たくさんのお話をありがとうございました。

附記

①現代女人歌集Ⅰ（女人短歌会編）角川書店刊。

昭和二十一年より昭和三十九年に至る間の会員の歌集、二百八十冊。各自、一冊から五十首より三十首ほどを自選。巻末に山本健吉氏文章「女流短歌を担ふもの」九頁分あり。

②現代女人歌集Ⅱ（女人短歌会編）角川書店刊。

昭和三十九年より昭和五十一年）に至る会員の歌集二百五十二冊より抄出。

代表・宮崎信義 編集・光本恵子

未来山脈

「新短歌」「未来山脈」合併

今日の言葉で自在に短歌を創ろうとする
現代口語短歌誌。

月刊 会費月1000円
見本 200円

投稿歓迎

〒393-0044
長野県諏訪郡下諏訪町湖畔6157-14
未来山脈社 光本恵子
Tel&Fax 0266-28-2442
Eメール miraisan@po.lcv.ne.jp
ホームページ
<http://www.lcv.ne.jp/~ktoshi/>
郵便振替 00530-0-7649